

# 釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□上□

財団法人・釧新教育芸術振興基金による平成十二年度(第二十九回)の「釧新郷土芸術賞」が決定した。今年には人間の内面にある思いを、仮面に託した作品などを描いている絵画の北村京子氏、油菓(ゆうやく)にもさまざまな工夫をして釧路にふさわしい釧路焼「陶豊窯」を開き新しい作品を追求している田中豊氏、高校吹奏楽部を九年連続全道大会に導くなど、その実力は高く評価されている音楽・指揮の中野国韻氏の三人が選ばれた。三人の業績や取り組みを紹介する。



絵画(油彩)

北村京子さん(58) 釧路市桜ヶ岡6の42の16

洋画家川本ヒロシ氏に師事

「仮面のある情景」。この同名のタイトルで最近は一連の大作を生み出している。中央に女性像を描いた半具象の油彩作品。茶系統の落ち着いた色彩、さりげないポーズの女性像がどっしりとした存在感で迫ってくる。そしてその中に浮かぶ仮面の顔。

釧美展会員で、全道展では一昨年と今年「奨励賞」を受賞。昨年からは挑戦した中央の公募展「行動展」でも昨年、今年と二年連続の入選を果たした。受賞作は、いずれも百三十号の仮面シリーズだった。

絵を始めて二十年以上になる。二人の子供が小学校に入り、時間に少し余裕ができたのを機会に「好きな絵を描けるようになりた」と、市内の絵画サークルに入会、洋画家の川本ヒロシ氏に師事した。主婦業の傍ら「地元の公募展での入賞を励み」に今日まで画

業を重ねてきた。

「わたしのは家事の合間に片手間に描く主婦の絵。中央に通用する作品なのか力を試そうと。気負いもなかった」と行動展での連続入選を喜ぶ北村さん。自宅

## 将来の夢は個展開催 「仮面シリーズ」で数々の入選

の時間が最も集中できる」  
そう、公募展が近づくと一日五、六時間筆を持ち続ける。

「今描きたいのは女性像。それも具象のキチツとしたものではなく、少し崩れたものが好き」。現実の細部にこだわらず、自由に頭にある心象風景をそのまま表現していく。モチーフは北国の景観から静物、そして仮面にと変わり、その仮面に託すのは「人の内面にあるさまざまな思い」なのだという。

真っ白なキャンバスに向かっても、時には二、三時間何も描けないこともある。そんな時は一面にうっすらと色を置くと、そこに人体などが見え始めてくる。さらにイメージを膨らませ、作品を引き出すようにデッサンに入っていく。百三十号の大作で完成までに約三カ月をかける。静物を題材にした小品も少なくない。

大地に根付く女性の生命力と、同じ絵の中に浮かぶ仮面のコントラスト。今も同じテーマで大作を精力的に制作中だ。「これからも公募展への挑戦を続け、将来の夢としてはまだ経験のない個展開催も考えたい」と話している。